

街中競技場
現代的な“都市とスポーツ”のあり方を求めて
Downtown field
The modern state of "city and sport"

福富 大真¹, 佐藤信治²
 *Hiroma Fukutomi¹, Shinji Sato²

Primarily, a sport has 4 of social meaning in the center such as young people's sound upbringing, causing of an area community, contribution to financial development and contribution to international friendship and goodwill.

But the life environment with which the people who live in a city are surrounded changed big every day, and you could live now on convenience comfortably by development of science and technology and a change in the labor form, the chance to touch a sport on the other hand is less and is being deprived of the social meaning.

The field where a sport is performed was pressed by construction to a suburb in saturation in downtown. The field in the downtown suburb is difficult to visit, and low of the customer development rate is a problem by each sporting world.

Of the increase and the area community which are social withdrawal as social problem, it becomes more frivolous, when it's also based that it was often taken up and was, it's obvious that the social meaning a sport has is being lost.

"Downtown field" is to play sports in a close relation with the people who live in a city, and I plan to recover the social meaning.

1. はじめに

本来、スポーツは①青少年の健全育成、②地域コミュニティの醸成、③経済発展への寄与、④国際友好・親善への貢献といった、主に 4 つの社会的意義が考えられる^[1]。

しかし、都市に生きる人々を取り巻く生活環境は、日々大きく変化し、科学技術の発展や労働形態の変化などにより便利で快適な生活ができるようになった反面、スポーツに接する機会は減り、その社会的意義を失いつつある。

人々はスポーツに親しむことによって、体を動かすという人間の本源的な欲求の満足感を得るとともに爽快感や達成感、他者との連帯感など、精神的な充足も図り、更には、体力の向上・ストレスの発散・生活習慣病の予防など、心身両面にわたる健康の保持増進に大きな効果を得てきた。

スポーツの象徴ともいえる近代オリンピックが初めて開催された 1896 年（明治時代後期）ごろ、日本でもスポーツという観念が広く知れ渡った。文明開化の最中の東京にも緑は残っていて、その中で当時の人々はスポーツを楽しんだ。都市に生きる人々とスポーツは密接な関係にあったと言える。

それから 120 年経ち、現代は街の様相も大きく変化した。都心は建築により飽和状態にあり、スポーツを行う競技場は郊外へと押し出された。都心郊外にある

競技場には足を運びにくく、各スポーツ界では集客率の低さが問題となっている。

社会問題として、引きこもりの増加や地域コミュニティの軽薄化が取り上げられることが多くなったことも踏まえると、スポーツが持つ社会的意義が失われつつあるのは明白だ。

“街中競技場”は都市に生きる人々とスポーツを密接な関係にすることで、その社会的意義を取り戻す計画である。

2. 計画背景

このような社会背景の中で 2020 年、スポーツによる国際友好・親善の証であるオリンピックが東京で開催される。これは都市の人々とスポーツを密接な関係にし、その社会的意義を取り戻す絶好の機会である。

しかし、東京五輪開催には乗り越えるべき問題がいくつか残っている。それらについて以下に触れていく。

- ・代々木競技場の耐震改修により、各スポーツ界は代替会場を必要としていること。

- ・施設建設の遅れによる施設不足の懸念。2016 年度には 8 件、そして 2018 年度から 2020 年度にかけては 12 施設の建設が集中して行われる。近年のオリンピックは、2008 年北京オリンピック、2012 年ロンドンオリンピックを除いてそのほとんどで施設建設が遅れ、直前になって大幅な計画変更を余儀なくされている。

1 : 日大理工・大学・海建 Department of Oceanic Architecture & engineering, CST, Nihon-U.

2 : 日大理工・専任講師・海洋建築工学科 Assistant Prof, of Oceanic Architecture & engineering, CST, Nihon-U, Dr. Eng.

・五輪後の施設解体、売却の不透明さ。東京五輪が終わった後は、施設は売却されることになっている。購入されなかった場合を考えると少々頭を抱える展開となる。

・コンパクトな東京五輪。東京五輪誘致の際のプレゼンで選手村を中心に半径 8 キロ以内に 8 割の施設を作るとコンセプトを掲げた。以下の地図は東京都が公開している五輪会場の予定地^[2]である。選手村のある豊海地区を中心に会場との距離を見てみると、半分近くのもの 8 km 県内でなくなっている。



Figure.1 Map

以上が東京五輪開催に向けてクリアすべき問題だ。

3. 基本構想

これらの問題を解決するなかで、新たな都市とスポーツの関係性を建築により生み出し、スポーツの社会的意義を取り戻していく。その手法として用いるのが、“街中競技場”である。

例えばサッカーを例に考える。通常は街の中にスタジアムの要素は溶け込んでいる。

ピッチは分散して、ビルなどに収納され、観客席も小さく折りたたんで隠されている。

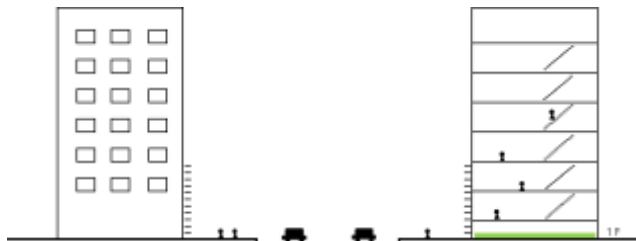


Figure.2 Diagram1

その後、競技開催に合わせて道路を封鎖し、競技場となる土台、ここではサッカーのピッチを道路に搬出し、一つにまとめ上げる。また観客席もそれに合わせせり出していく。



Figure.3 Diagram2

こうして、街は一時的に競技場へと様変わりする。道路やビル、街全体が熱狂する観客席となる。



Figure.4 Diagram3

ある程度の広さの道路を要すれば、この空間はどこであっても実現可能である。都心の街中に出来上がるからこそ、老若男女、多人種の人々は集い熱狂する。

4. 敷地選定

敷地はある一定の条件下であればどこにでも設定できる構想ではあるが、本計画では東京五輪を想定して選手村のある東京中央区豊海地区から半径 8 km 圏内に設定して計画を行っていく。



Figure.5 Plan site^[3]

5. 参考文献

[1] 現代社会におけるスポーツの意義 HP
 [2] 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 HP
 [3] GoogleMap より